

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.275

3-4

March & April 2026

特集

02

聲明「しょうみょう」
千年を超える伝統と
新たな創造



- 06 進化を続ける庄司紗矢香の“今”
- 08 小菅優インタビュー「ソナタ・プロジェクト」最終回にむけて
- 10 大西順子インタビュー トリオ公演に寄せて
- 11 クリストフ・プレガルディエン&渡邊順生 出演者からのメッセージ
- 12 連載「シューベルトの歌曲の楽しみ方」第1回

© MATHRAX

水戸芸術館
ART TOWER MITO

聲明—— 千年を超える伝統と新たなる創造

文：篠田大基

水戸芸術館で約30年ぶりとなる聲明^{しょうみょう}（声明）のコンサートを、3月14日（土）に開催します。仏教の経文に旋律をつけて詠唱する声の芸術「聲明」は、奈良時代に日本に伝わり、今日まで連綿と受け継がれてきました。ヨーロッパの修道院で中世以来歌い継がれるグレゴリオ聖歌が、西洋クラシック音楽の原点と考えられているのと同様に、聲明は、平曲、能（謡曲）、浄瑠璃などに影響を与え、日本の伝統芸能の源流の一つともされています。

今年2026年は、東日本大震災から15年という節目の年にあたります。今回のプログラムでは、天台宗と真言宗の僧侶たちによる伝統的な「四箇法要」^{しかほうよう}を軸に、震災の津波で亡くなった女性が生前に詠んだ短歌と、その息子による返歌を用いた新作聲明^{うみざりさんだん}〈海霧讃歎〉^{うみざりえこう}が上演されます。長い歴史を持つ祈りの形式に、震災の記憶と言葉が重ね合わされ、聲明は「いま」を生きる私たちと響き合う表現として立ち現れます。僧侶たちの声は、単なる音楽表

現やパフォーマンスを超え、聴く者それぞれに深い余韻をもたらすはずです。

本特集では、コンサートの構成・演出を手がける田村博巳さんに、日本における聲明公演の歩みについてご寄稿いただきました。また、新作聲明を作曲した宮内康乃さんには、インタビューを通して、創作の背景や聲明の魅力をお話いただきました。公演を前にぜひ本特集を通して、聲明の「これまで」、そして「いま」に触れてみてください。

声明の会・千年の聲 新作聲明公開の足跡

文：田村博巳
（声明の会・千年の聲構成・演出）

日本の仏教寺院で、僧侶が儀式のときに唱える声楽を「聲明」^{しょうみょう}といいます。もとは古代インドの五種学問（五明）^{ごみょう}の一つで、言葉の学問（シャブダ・ヴィドヤ）を意味し、サンスクリット（梵語）の学習のため密教とともに日本に伝え

られました。一方、インドから中国を経て日本に伝えられた仏教の声楽は、一般に「梵唄」と呼ばれていましたが、鎌倉時代以降は「聲明」の用語が「梵唄」の代りに用いられるようになりました。仏教が日本へ伝えられたのは6世紀頃ですが、当初の法会は転経（読経）と講経（講義）が主で、聲明の存在が明らかとなるのは、752年の東大寺大仏

開眼供養で唱えられた四箇法要^{はい}（唄・散華・梵音・錫杖）^{さんげ ほんのん しやくじょう}が最初です。その後、9世紀の初めに弘法大師空海により真言聲明が、中頃に慈覚大師円仁により天台聲明が中国から伝えられました。真言宗、天台宗いずれも、平安の新しい時代^{なるがくそう}に遣唐使の留学僧・請益僧^{しゅうやくそう}として、当時の唐における最新仏教であった密教を漸進的に取り込んだもの



です。以後のどの宗派の声明も、この二大潮流のどちらかに源を発し、影響を受けることになります。そして12世紀平安後期より14世紀の鎌倉・南北朝期に隆盛し、記譜法・音律論・演唱法等が整備されました。1472年には、現存する年紀の明らかな印刷楽譜としては世界最古の「声明集」が高野山(南山進流)で刊行され、声明の普及がはかられました。

1966年に始まる国立劇場の声明公演は、記録保存はもとより、劇場という空間で仏教儀礼を一般観客に公開するという画期的な取り組みでした。第1回は天台宗比叡山延暦寺の(魚山秘曲三十二相)と真言宗豊山派(長谷寺の(二箇法用付大般若転読会))が公開されました。導師は、天台宗は中山玄雄師(1902~1977)が、また豊山派は青木融光師(1891~1985)が務め、声明の存在を広く人々に知らせることになりました。声明は、その歴史と音楽性において、キリスト教のグレゴリオ聖歌とともに、すぐれた宗教(典礼)音楽として、今日高い評価を受けていますが、明治以降、西洋音楽が主流となってからは多くの僧侶にとって仏教儀礼で唱える声明にとくに関心を寄せる機会はありませんで

た。第二次世界大戦後、忘れ去られていた日本の伝統音楽の声明が再発見されたのは、若い現代音楽家によるものでした。黛敏郎(1929~1997)は梵鐘・咒・天台声明の響きに魅せられ(涅槃)交響曲(1958年)を、柴田南雄(1916~1996)は東大寺お水取りの声明に触発され(修二會讚)(1978年)を作曲し発表しました。しかし、これらの声のパートはいずれも合唱団が担っていました。また、小泉文夫(1927~1983)ら民族音楽学の研究者による真言声明への関心が高まる中、レコード録音がすすみ、その旋律を五線譜で記譜することが行われました。このときの経験は、僧侶の側も声明の伝承そのものに認識を深めるとともに、改めて声明に対する意識を促されることとなりました。

そのような状況の中、第1回声明公演に出演した天台・真言両声明家とその弟子たちが、声明の伝統的音楽理論に根ざした新たな取り組みを牽引しました。1983年、第34回雅楽公演で、国立劇場委嘱によるジャン・クロード・エロア(1938~2025)の(観想の焰の方へ)の声のパートに天台宗の海老原廣伸・京戸慈孝、真言宗豊山派の孤嶋由昌・新井弘順の四師が加わるという画期的な試みがその始まりです。

国立劇場が目指したのは古典への深い洞察力と創作への鋭い探究心の両方を備えた僧侶自身の声による作品でした。翌1984年には第19回声明公演で石井真木(1936~2003)の(蛙の声明)の初演に天台・真言の僧侶が参加し、以後、国立劇場で僧侶の声をういた新作が次々と初演されていきます。様々な現代作品の「声」の音楽に積極的に参加した僧侶たちは、舞台芸術とおし声明の普及に大きく貢献することになりました。

言葉を運ぶ線的な不思議な抑揚や厳しいまでに荒々しいヴァイタリティは西洋の音楽史の網の目からこぼれ落ちていた異質の音楽の霊力です。国内外の作曲家たちは声明の持つ精神性や音楽的表現性に注目していましたが、僧侶自身の声による新作は僧侶の声明に対する意識の変容をもたらし、さらにその表現の領域をも広げました。

新作の現場が国立劇場から青山スパイラルへと大きく舵を切る要因となった二つの作品が吉川和夫(1954~)の(論義ビヂテリアン大祭)(1991年)*



海老原廣伸(天台)、孤嶋由昌(真言)、京戸慈孝(天台)、新井弘順(真言)、背景は「シャブダ」
1999年3月30、31日 スパイラル聲明コンサートシリーズ「千年の聲」vol.2 《阿吽の音》より

と鳥養潮(1952~)の(阿吽の音)
(1995年)です。1997年、天台宗の海老原廣伸・京戸慈孝、真言宗豊山派の孤嶋由昌・新井弘順の四師は、宗派を超えた取り組みを目指して「聲明四人の会」を結成しました。また、若手聲明家グループ「シャブダ」を加え、海老原廣伸師が主宰した「七聲會」と、孤嶋由昌師が主宰する「迦陵頻伽聲明研究会(以下「迦聲研」という)」が活躍することになります。1998年から「聲明四人の会+シャブダ」(2003年より「声明の会・千年の聲」に改称)は、青山スパイラルを拠点に「スパイラル聲明コンサートシリーズ「千年の聲」」を開催し、神奈川県立音楽堂をはじめ各地の劇場、音楽堂等での公演も継続的に行い、国立劇場での新作を再演し、また新たな委嘱作品の初演も手掛けました。国立劇場や青山スパイラルの公

演活動が評価され、現代の作曲家のみならず、大衆からも聲明が見直され、新しく探究されています。1973年、真言宗豊山派の僧侶は国際交流基金による海外長期派遣の助成を受け、テヘランほか、欧州・北米の11都市で、1978年には天台宗がパリを中心に聲明公演を行いました。この海外公演を皮切りに、海外の音楽祭からの招聘公演も相次ぎ、キリスト教の教会内で新作聲明作品(1986年 石井真木の《蛙の聲明》ベルリン、2014年 鳥養潮の《存亡の秋》ニューヨーク)が公開されることも珍しくなくなりました。寺院内で伝承されるのみであった聲明はいま日本のみならず世界の音楽家から注目を集めています。

「声明の会・千年の聲」は、京戸慈孝師(1942~2008年12月没)の離脱は

ありましたが、伝統の研鑽と現代の創造に積極的に取り組み、宗派を超えた活動を展開してきました。その後、天台聲明の可能性を追求しつづけた海老原廣伸師(1941~2021年12月没)と真言聲明の普及・発信に情熱を傾けた新井弘順師(1944~2022年3月没)が相次いで逝去されました。七聲會は海老原廣伸師の志を継ぐ僧侶たちが継承し、迦聲研は故青木融光大僧正を相承し、「声明の会・千年の聲」の精神的支柱となった孤嶋由昌師(1941~)の指導のもと約50年の歴史を刻んでいます。2025年、孤嶋由昌師は「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に選択されている「真言聲明」の関係技芸者に青木融光大僧正以来47年ぶりに指名されました。文化庁は「音楽、舞踊、演劇その他の芸能及びこれらの芸能の成立、構成上重要な要素をなす技法のうち我が国の芸能の変遷の過程を知る上に貴重なもの」として、「真言聲明」及び「天台聲明」に対しその選択基準を定めています。

※水戸芸術館では1997年5月11日に上演(企画:間宮芳生、構成・演出:田村博巳)。



2012年1月24、25日 スパイラル聲明コンサートシリーズ「千年の聲」vol.20 鳥養潮(存亡の秋)より
©Tsukasa Aoki



1997年5月11日 水戸芸術館 吉川和夫(論義ビザテリアン大祭一声明と狂言の語りのために一付「宗論」)

祈りの声、響きの波——新しい声明を作る

作曲家・宮内康乃インタビュー

聞き手:篠田大基



宮内康乃(作曲家) ©KENJI KAGAWA



©KENJI KAGAWA

—まず、宮内さんが声明に関心を持たれたきっかけを教えてください。

最初は大学院の時ですね。IAMAS(情報科学芸術大学院大学)というテクノロジー・アートの学校にいて、最先端の技術を使った表現と自分がこれまでやってきた身体を通して演奏する音楽との間で、どう折り合いをつければいいのか、かなり悩みました。それで、なぜ音楽が生まれたのかと考えるようになって、世界のいろいろな民族音楽を聴く中で声明を見つけたんです。聴いてみて、声の倍音の豊かな響きに本当に驚きました。でも将来、声明を作曲することになるとは、当時まったく思わず……。

—それがどんな経緯で声明を作曲することになったのでしょうか？

大学院を出てすぐの2009年に、トーキョーワンダーサイト(TWS。現・トーキョーアーツアンドスペース)のコンペティションに応募したのがきっかけでした。声のパフォーマンス(つむぎね)で応募したところ、思いがけず最優秀賞をいただいたんです。審査員に作曲家の一柳慧さんがいらして、楽譜によらない音楽表現に興味を持ってくださったと聞きました。2012年に開催する神奈川県立音楽堂で声明作品の新作委嘱の話が出たとき、一柳さ

んが、声明は五線譜で書かれない声の音楽だから、と私の名前を挙げてくださったそうです。

その委嘱の話の直前に、同じTWSで、東日本大震災の体験を記録した映像作品を見たことがありました。作者の佐藤見さんのお母さまが津波で行方不明になって、葬儀の場で、お母さまが生前に詠んでいた「海霧にとけて我が身もただよはむ 川面をのぼり大地をつつみ」という、まるでご自身の運命を予見していたかのような短歌を家族が初めて知る、という内容でした。その出会いから、祈りの声の音楽に取り組みたいと思った矢先、声明の新作委嘱のお話をいただいたんです。「ぜひやりたいです」と即答しました。声明は祈りのメッセージを伝える音楽なので、何か作品の象徴となる言葉を、と探す中で、あのお母さまが残された短歌が浮かんできて、〈海霧讃歎〉が生まれました。

—同じ短歌を天台声明と真言声明それぞれで唱えることになりますが、旋律も両派で同じですか？

違うんです。天台宗と真言宗では同じ言葉を唱えるのでも、旋律や唱え方が違うので、私もそれぞれの特徴を作品に反映させるようにしました。両派がそれぞれの譜を見てそれぞれの旋

律を繰り返して唱え、少しずつずれたり重なったりしていきます。稽古では、互いの呼吸や重なりをすり合わせるのに、一番時間をかけています。

—今回の上演に向けては水戸芸術館に見学にも来ていただいて、準備をしてくださっていますね。コンサートにいらして下さるお客様にメッセージをお願いします。

水戸芸術館のホールは客席が円形に包まれるような作りなので、今回の演出にはとても理想的だと感じています。声の響きを耳だけでなく全身で体感していただく作品なので、その空間で生でしか伝わらない響きの魅力を体験してほしいですね。震災の弔いという背景はありますが、難しく考えずに、ただ響きの波に身を浸して、心が軽くなるような、心地よい時間を過ごしてもらえたらと思っています。

■公演情報

伝統芸能のススメ [聲明]

四箇法要 花びらは散っても花は散らない
附 宮内康乃作曲 〈海霧讃歎〉 〈海霧廻向〉

2026.3.14(土) 14:30開場 15:00開演
全席指定 一般¥4,500
U-25(25歳以下)¥1,500

●出演

声明の会・千年の聲
【七聲會(天台聲明)、迦陵頻伽聲明研究会(真言聲明)】

進化を続ける庄司紗矢香の“今”

取材・文：山田治生（音楽評論家）



©Laura Stevens

ヴァイオリニストの庄司紗矢香とピアニストのジャンルカ・カシオーリとのデュオが、4年振りに日本公演を行う。二人は、2009年に初共演して以来、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全集の録音を完成させ、現在はモーツァルトのヴァイオリン・ソナタ集の録音に取り組む（既に2枚リリースしている）など、コラボレーションを続けている。

前回（2022年）の日本ツアーで、二人は、ガット弦を張ったヴァイオリンとフォルテピアノによるモーツァルトやベートーヴェン、C.P.E.バッハなどの古典派プログラムで、親密な対話のような演奏を披露した。今回は、通常のリサイタルのスタイルで、モダン仕様のヴァイオリンとピアノで、モーツァルトの〈ヴァイオリン・ソナタ

ヘ長調〉K.376、ブラームス、ディートリヒ、シューマンの3人の共作である〈F.A.E.ソナタ〉、ブラームスの〈ヴァイオリン・ソナタ 第1番「雨の歌」〉、そして、20世紀イタリアの作曲家ダラピッコラ（1904～1975）の〈タルティーニアーナ 第2番〉という幅広い時代の作品を演奏する。

ジャンルカとはモーツァルトのソナタをフォルテピアノとヴァイオリンのデュオで取り組んで

きましたが、今回は他の曲に合わせて普通のピアノで弾きます。

前回の時もガット弦&フォルテピアノという表面的な設定が必ずしも我々のアプローチにおいて一番重要なポイントではない、ということをお伝えしているのですが、それを再びコンファームする形となります。

何かに留まることなく、進化を続ける庄司紗矢香は、2月のリサイタルのプログラムについてこう語る。

いつもリサイタルでは、その時に取り組みたい曲を中心に組みます。そこから超現実主義者の様に、隠れた無意識下の意味をアナライズするのも面白いです。

今回はブラームスの〈第1番「雨の歌」〉の詩の様に霧に包まれたような、何かの香りを頼りに思い起こす遠い昔を振り返るようなプログラムになっています。これはシエナで室内楽を勉強した90年代に、ダラピッコラの楽譜を手に入れ、ずっと公に弾く機会を待っていた事も、私の子供時代の思い出として繋がります。

ダラピッコラは、〈タルティーニアーナ 第2番〉（注：イタリア・バロック時代の作曲家、タルティーニの主題をもとにしている）でバッハが使った様々なカノンを使用しており、作曲法の観点からも興味深い作品だと思います。

〈F.A.E.ソナタ〉ではライン川へ向かう直前にいるシューマンとシューマンに出会ったばかりの若きブラームス、そしてギゼラ（注：作家のベッティーナ・フォン・アルニムの娘ギゼラ・フォン・アルニム）への複雑な関係に悩む22歳のヨーゼフ・ヨアヒム（注：ブラームス、ディートリヒ、シューマンの共通の友人であり、〈F.A.E.ソナタ〉の献呈を受けた名ヴァイオリニスト）、しかもそこにはギゼラ自身と、ベートーヴェンやゲーテのミューズでもあったベッティーナも居合わせる。若さと年を経てからの想いが交差する、矢印が交わる様な…レミニセンスという美しい言葉が思い起こされます。

つまり、20世紀のダラピッコラは200年前のタルティーニに遡り、ブラームスは、友人ヨアヒムを通して、シューマンどころかベートーヴェンまでつながる。そういう、時間を越えた



庄司紗矢香&ジャンルカ・カシオーリ

想いや物語こそが今回のリサイタルのコンセプトなのであろう。

昨年、庄司は、日本では、6月にラハフ・シャニ指揮ロツテルダム・フィルハーモニー管弦楽団の来日公演でベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を弾き、9月に香川県直島での「ナオシマ・シネステジア・フェスティバル」の芸術監督を務め、11月には広島交響楽団や東京都交響楽団とシューマンのヴァイオリン協奏曲を共演したが、彼女にとっての2025年はどのような年であったのだろうか？

2025年はある種の節目であった様に思います。ウィーン楽友協会での演奏会(注:ガブリエル・ベベシエラ指揮トーンクンストラ管弦楽団とのブラームスの協奏曲)に始まり、様々な素晴らしい共演者とシューマンやブラームス、ベートーヴェンを

中心に取り組む機会を得ました。また熟考を重ねた上でのモーツァルトの協奏曲(注:3月のシュトゥットガルト室内管弦楽団、4月のKBS交響楽団、プラハ・フィル、8月のイタリアのボルツァーノ弦楽アカデミーとの共演)も刺激的な経験でした。2026年からは、新たなレパートリーの準備期間に入ります。準備し、舞台を踏み、煮込み、寝かす、起こすという緩やかな螺旋階段の様なプロセスを、この25年間繰り返しています。

好奇心と探求心に富む彼女に、最近の関心事についてきてみました。

読書と自然でしょうか。ガストン・バシュラール(注:フランスの哲学者、1884~1962)の夢想の詩学は今回のプログラムについての考えにも影響していると思います。今週はアルセニー・タルコフスキー(注:ウクライナ

の詩人、映画監督アンドレイ・タルコフスキーの父、1907~1989)の詩に没頭しています。あとは土いじりや森の散歩、植物の世話をするのが好きです。

協力:株式会社ジャパン・アーツ

■公演情報

庄司紗矢香& ジャンルカ・カシオーリ

2026.3.7(土) 14:30開場 15:00開演
全席指定 一般¥6,000
U-25(25歳以下)¥2,000

●出演

庄司紗矢香(ヴァイオリン)、
ジャンルカ・カシオーリ(ピアノ)

●曲目

モーツァルト:ヴァイオリン・ソナタ 第24番
(第32番)へ長調 K.376(374d)
ブラームス、ディートリッヒ、シューマン:
F.A.E. ソナタ
ダラビッコラ:タルティニアーナ 第2番
ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ 第1番
ト長調 作品78(雨の歌)

小菅優インタビュー

「ソナタ・プロジェクト」最終回にむけて

聞き手・構成：山野雄大（音楽評論家）



©Takehiro Goto

ピアノが優しく（ときに激しく!）彫り磨いてゆく美しい陰翳は、〈ソナタ〉というかたちに驚くほど豊かな小宇宙を広げてみせる。— 充実をいよいよ深めるピアニスト・小菅優が、〈ピアノ・ソナタ〉の多彩な魅力をユニークな視点で見直してみせるプロジェクトが、遂に最終回を迎えます。

各回ごとに「開花」「夢・幻想」などテーマを定めて、それに合わせた選曲でくり広げられてきた本シリーズ、最後のテーマは「黄昏」です。青かった空が沈みゆく陽の色に染められて、明るい橙色から刻々と夜の色へ……そんなたそがれの光景は、人生の暮れ時にさしかかった作曲家たちの想いと重なり、素晴らしいソナタを生むこともあったでしょう。あるいは、（それとは知らず）生涯の早すぎる黄昏を迎えていた作曲家の、はからずも最後になってしまったソナタには、天才ならではの不思議な「別れの予感」が響いてい

るかもしれません。

黄昏、をテーマに選ばれた3つのピアノ・ソナタ。小菅優さんにお話を伺いました。

最終回は「黄昏」のソナタ

—素晴らしい演奏を聴かせていただいたシリーズも、いよいよ最終回ですね。

小菅：始まってみたら、意外とあっという間に来てしまいました。あらためて、ソナタって（弾くのは）難しいなあと思います。形式があるからこそ、そこに凝縮されるものも大きい。特に最終回の今回は「ソナタ中のソナタ」という感じの作品が並んでいますから、弾くのは大変（笑）。

—モーツァルトにウェーバー、シューベルトと3人の作曲家が書いた最後のソナタを選ばれていますが、3人と

も30歳代で亡くなってしまった人ですね。その早すぎる晩年に、どれくらい「死」を意識していたのかは分かりませんが、音楽には何故か、予感めいたものが響いている気もします。

小菅：どの曲も、どこか不気味な要素を含んでいますね。ただ寂しいとか悲しいというのではなくて、どこかに「死」が見えているような、現実味のある恐怖というか……。それでいてどこか悟ったような優しさもある。そこには、人生経験を重ねてきただけではなく、様々な作曲の経験を積んできた人にしか書けないもの、もあると思います。

待ち焦がれても訪れない

春のように—

モーツァルト最後のピアノ・ソナタ

—冒頭には、モーツァルトが亡くなる2年前に作曲した最後のピアノ・ソナタ、第18番 二長調 K.576（1789年）を弾かれます。

小菅：モーツァルト後期作品にある信じられないほどの美しさには、待ち焦がれているけれど訪れない春を待つようなものを感じます。この二長調ソナタは、そうした晩年の作品の中でも特に完成度が高い。ポリフォニー（対位法。複数の声部が異なる動きで重なる）が優れていますし、イ長調で書かれた第2楽章も……このイ長調というのはモーツァルトにとって特別な調性ですが、途中で出て来る嬰へ短調がまた、淋しさの中に赦しを求めているようでもあり、これでいいのか……と求めて突き詰めていってもたどり着けないもの、も感じますし、単なる美

しさではないんです。

—「憧れ」ともまた異なるし「諦め」でもない、美しいもどかしさ、みたいなものも感じます。

小菅：シンプルなのに、こんなにも深い。モーツァルトの作品は最初から凝縮されていますが、この曲にも、余計なところがまったくない。聴くのはいいけど弾くのは難しい(笑)。

—いろいろなものを見てしまった人が突き抜けた先の、黄昏のソナタです。

小菅：たとえばシューベルトには、もう少し生きて書いてほしかった、と思うんですけど、モーツァルトの場合、ここで完成。……私はモーツァルト作品ではピアノ協奏曲をよく弾くのですが、アンサンブルなど対話の中にある即興的な楽しさを、ソナタでは一人で表現する。これは私にとっては怖いことなんです。このソナタも、今までコンサートで弾いたことがありません。でも、このシリーズで一番の挑戦を最後に持って来たかったので、今回は自分にとって一番怖いことを演じます(笑)。

長く憧れてきた「黄昏」の深み—
ウェーバー最後のピアノ・ソナタ

—続いて、ウェーバーのピアノ・ソナタ第4番 ホ短調 作品70(1822年)です。ドイツの作曲家ウェーバーは、モーツァルトとも親戚にあたる人ですね(父の兄が、モーツァルトの妻の父)。ピアノ曲では「舞踏への勧誘」など有名な作品もあるなか、彼のソナタは演奏会で聴かれる機会もあまりないのでは。

小菅：この曲は、尊敬するレオン・フライシャー氏(1928~2020)が若い頃に弾いた録音を何回も何回も聴いて、十

代の頃からずっと憧れてきた作品なんです。ウェーバーのピアノ曲でも、この曲は晩年の特別な深さを持っている……と最近あらためて思い直して、今回の「黄昏」というテーマにもふさわしいのではと考えました。

—聴いてみると、コンサート後半に弾かれるシューベルトの作品とも、自然に繋がるような曲だとも感じますね。

小菅：そうなのです。実際にシューベルトからの影響もあったと思いますし、もちろんモーツァルトからの影響もありますから、今回の3人をあわせて聴いていただくと、統一性も見えてくるはずですよ。

—有名なオペラ《魔弾の射手》が大成功を収めて名声の絶頂にあった36歳頃の作品ですが、実は健康を害したりと、彼の人生の残りはもう数年しかありません。

小菅：オペラの大成功の裏では失敗も怒りもあり、葛藤がこのソナタにも見えますよね。第1楽章から、もう微かな希望しかない。歌のリリズム(抒情性)もありますけど、すべてがメランコリックに落ちてゆく。第3楽章だけは慰めを感じる音楽ですが、それ以外は本当に熱い曲なんです。第2楽章にも怒りを感じますし、最後まで怖いですよ。終楽章がタランテラ(イタリア起源の速い舞曲)で、踊って疲れ切って死んでしまうという、毒の回った感じがする。

今が永遠に続いてゆくような—
シューベルト最後のピアノ・ソナタ

—最後は、シューベルトが亡くなる年に書いたピアノ・ソナタ 第21番 変口長調 D960(1828年)をお弾きいただきます。

小菅：シューベルトは、ずっと迷ってきすらっている人ですが、この最後のソナタでもそう。どこか既に悟ったようなところもありながら、想い出を振り返り、人生のすべてを語っているような音楽だと思います。自然に流れてゆく人生の歩みのなか、つねにどこかにある痛みも響いていたり。第2楽章など、今が永遠に続いてゆくような時間の流れ、を考えたりもします。第3楽章には、どこか平和で純粋なところがありましたけど、第4楽章になるとまた不気味なところがあって、やはりずっと何かを探している。その先に、やがて天使が救いに来るような美しさもあって……しかも、エンディングも「はい、終わり」って感じじゃない(笑)。それまでいろいろなことがあって、感動して涙を流したあとで「ああ!」となにかのドアを開いたところで終わる。不思議な曲ですよ。

—シリーズの最後にこの曲が来て、そういう終わり方をする、というのなんかいいですね(笑)。

小菅：なにか次に繋がるような(笑)。

—シリーズ最後のコンサートで、どんな一期一会の感銘を体験できるのか、心から楽しみにお待ちしています。

■公演情報

小菅優「ソナタ・プロジェクト」 Vol.4(最終回) 黄昏

2026.3.22(日) 14:30開場 15:00開演
全席指定 一般¥4,000
U-25(25歳以下)¥1,500

●曲目

モーツァルト:ピアノ・ソナタ 第18番 二長調
K.576
ウェーバー:ピアノ・ソナタ 第4番 ホ短調
作品70
シューベルト:ピアノ・ソナタ 第21番 変口長調
D960



大西順子インタビュー トリオ公演に寄せて

聞き手:角増 柊

どのピアニストさんたちも皆さん同じ条件で日々演奏されていると思います。なので、私に特別なパワーやスタミナがあるとは思っていません。

—今回トリオという編成となった理由、また、トリオだからこそのおもしろさや難しさ、聴きどころなどを教えてください。

ピアノトリオは日本ではとても人気のある編成で、私もピアノトリオで活動する時間が長かったです。パーカッションの大儀見さんが入ったカルテットも、ホーン

セクションが入ったセクステットもすべてピアノトリオが母体となっています。

一度、ピアノトリオに立ち戻って皆様に王道のサウンドを楽しんでいただければと思います。これも私にとっては、また新たなチャレンジです。

あまりにも素晴らしい名演がすでにたくさん存在しますから、ピアノのレンジをフルに使い、まるでビッグバンドのようなアレンジから少ない音数やピアノニッシモの音でのアレンジまで、可能性は無限大です。今からどんなことをやろうか、ワクワクしています。

—大西さんから見て、ベースの中林薫平さん、ドラムスの吉良創太さんのサウンドやプレイには、それぞれどんな特徴がありますか。

ドラムの吉良くんは、私のソロ以外

のすべての活動に参加してくれています。今や、私の活動になくてはならない存在になってくれました。向上心がとてもあり、トラディショナルなジャズにも、新しいアプローチにも、私の向かう方向と一緒に付き合ってくれています。

ベースの中林くんは最近活動を共にするようになりました。彼は私の過去の演奏などまったく聴いたことがないので、ある意味、ゼロから音楽を作っていくには良いベーシストなのではないかと期待しています。

—最後に、皆様へのメッセージをお願いします。

いつもどんな内容でも真剣に聴いてくださる皆様相手に今度はどんなことをやろうかと、スタッフ共々水戸芸術館での公演をとても楽しみにしております。

今回のトリオ公演もどうか、皆様、最後まで楽しんでいただけましたら嬉しいです。

—2022年のカルテット、24年のセクステット、25年のソロに引き続き、4回目の水戸芸術館でのご公演となります。過去3回の公演、特に前回のソロ公演を振り返って、いかがでしたか。

いつもお客様の反応がとても良くて嬉しいです。ソロは、内容が маниアックなこともあり伝わりづらいかとも思いましたが、いつも通り熱心に聴いていただきありがたかったです。個人的に、たいへん収穫のあった公演となりました。

—前回のソロ公演では、途中の休憩時間を除きほぼ2時間ぶっ通して演奏いただき、その姿に対する感動のお声も、多くのお客様からいただきました。そのパワーやスタミナの源は、ズバリ何でしょうか。

■公演情報

大西順子 トリオ

2026.3.29(日) 15:30開場 16:00開演
全席指定 A席¥6,000、B席¥5,000、
U-25(25歳以下)¥2,500

●会場
水戸芸術館 ACM劇場

●出演
大西順子(ピアノ)
中林薫平(ベース)
吉良創太(ドラムス)

クリストフ・プレガルディエン&渡邊順生

出演者からのメッセージ



水戸のみなさまへ

長い年月を経て、再び水戸の皆さまの前で歌曲リサイタルを行う機会をいただけることを、心より嬉しく思っております。今回は、優れた音楽的感性と深い詩情を併せ持つピアニスト、渡邊順生氏とともに、フランツ・シューベルトの遺作集《白鳥の歌》をお届けいたします。

ここで、1991年に始まった私自身にとってひとつの大切な交流の環が静かに結ばれます。

1991年、私にとって初めての来日となったその年、栃木[蔵の街]音楽祭でのバッハ《口短調ミサ曲》を歌い、静岡、東京等で渡邊順生氏とともに、シューベルト《美しき水車屋の娘》による歌曲リサイタルを開催いたしました。1994年4月には、水戸でバッハ・コレギウム・ジャパン、鈴木雅明氏とともに《マタイ受難曲》を演奏し、1996年にはアンドレアス・シュタイアー氏と《冬の旅》を携えて再び水戸を訪れるという、忘れがたい音楽の記憶が、この街と深く結びついています。

そして今回お届けするのが《白鳥の歌》です。シューベルトが人生の最晩年に書き遺したこれらの歌曲は、《冬の旅》や《美しき水車屋の娘》のような物語的な連作ではなく、ルートヴィヒ・レルシュタープとハインリヒ・ハイネの詩による13の歌曲から成る、約50分の珠玉の作品集です。その構成の自由さゆえに、私たち演奏家は楽曲の配列を再構

成し、さらに数曲を加えることで、一夜のリサイタルとして完結したひとつの音楽世界を描くことができます。

本公演では、第1部にレルシュタープの詩による7曲を中心に、そこへ音楽的・ドラマ的に美しく呼応するシューベルトの3曲を加えてお聴きいただきます。第2部は、エルンスト・ヴィルヘルム・シュルツェの詩による4曲で幕を開け、やがてハイネの詩による6曲へと至ります。その内省的で陰影に富む響きは、心理的にも音楽的にもきわめて自然な流れを生み出し、小さな「内なるドラマ」を形づくります。とりわけハイネの歌曲については、私は長年にわたり、慣習的な配列とは異なる順序で演奏してまいりました。この構成こそが、この作品に秘められた感情の物語を、最も明晰に、そして深く浮かび上がらせると信じているからです。

水戸という、私の音楽人生において特別な場所で、皆さまとこの《白鳥の歌》を分かち合えることを、心より楽しみにしております。このリサイタルが、皆さまの心に静かな余韻として長く残るひとときとなりますように。心よりの感謝とともに。

クリストフ・プレガルディエン



プレガルディエンと シュトライヒャーのピアノ

1990年の5月、水戸芸術館の開館記念シリーズでチェンバロを弾かせて頂いた時には、ホールの素晴らしい響き

に強い感銘を受けました。それまでお目にかかる機会のほとんどなかった故吉田秀和館長(当時)と親しくお話できたことも忘れ難い思い出となっています。あの時も午年でしたが、それからちょうど日本風に言うと三周り、再びあの素晴らしいホールで、しかも今度は敬愛するプレガルディエン氏との共演のために水戸へ行ける、というのは夢のような話です。

《白鳥の歌》の第7曲(別れ)という歌曲をご存じですか。馬のひづめの音も軽やかにこれから楽しい旅に出ようという曲で、その馬のひづめの音を模したピアノ伴奏のとても印象的な曲です。私の頭の中では、その軽快な響きがぐるぐると回っています。歌ももちろんですが、シューベルトは何と美しいピアノ伴奏のパートを書いたのでしょうか。それは彼が愛用していた当時のピアノでなければ出すことのできない音なのです。

今回の公演で私が特に嬉しく思っているのは、ナネツチ・シュトライヒャーの製作したフォルテピアノの音を水戸の皆さんに聴いて頂ける、ということです。ナネツチ・シュトライヒャーは、19世紀の最初の四半世紀のウィーンにおける最高のピアノ製作者で、彼女の作り出す、玉を転がすような軽快さと重厚なまでの渋みを兼ね備えたピアノの音はベートーヴェンを熱狂させました。ナネツチ・シュトライヒャーのピアノは現存数が少ないために録音でも聴ける機会はなかなかありません。プレガルディエン氏の美しい声とシュトライヒャー・ピアノの音色は、シューベルト自身が思い描いていた歌曲の響きの理想を皆様にお聴かせできるのではないかと今からわくわくしています。

渡邊順生

「シューベルトの歌曲の楽しみ方」第1回

さすらうシューベルト、さすらうあなた

文：堀 朋平(美学・音楽学)

さすらい、さまざま

NHKの朝ドラ「ばけばけ」(2025-26)を楽しみに観ています。西洋音楽とつきあってきた者にとってはなおさらでしょうか、近代ヨーロッパの300年をわずか40年で駆け抜けた——と漱石の『三四郎』も描くとおりの——明治の人びとの泣き笑いに、ひどく揺さぶられるのです。

にわかにな没落した武士階級の憂き目にあって、新たな人間関係の波へと投げ出された武家の娘。はるばる海を越え松江にやってきて、寒さにふるえ、カタコトの日本語で暮らす物書き。2人は、先の見えない道を手探りで歩く思いだったでしょう。

そんな男女の心のなかを照らし出すような主題歌が、またいい。

「帰る場所など とうに忘れた 君とふたり 歩くだけ」(ハンバートハンバート《笑ったり転んだり》)

映像とともに聴いていると、思わず「ほろり」としてしまふ。故郷を失ってさすらい感覚は、明治の100年後でも共有できるからでしょう。いえ、むしろ世界情勢も台所事情もどどん暗くなる、そんな今を生きなくてはならない私たちこそ、皆さすらい人なのかもしれません。

もちろん「旅」はずっと昔から愛すべき芸術のテーマでした。古代ギリシアの『オデュッセイア』は、英雄オデュッセウスによる10年におよぶ帰郷の航海をつづった叙事詩です。なので、そこから生まれた「オデュッセイ=旅」という言葉は、帰るべき場所があ

ることを前提にしています。どれだけ時間がかかっても、どれだけ苦難に遭っても、主人公はきっと故郷に帰れるのです。

ところが「自分たちには帰る場所がないのではないだろうか?」という感覚に捉われる時代がやってきます。哲学者ヘルダーは「人は求めるが、けっして見いだせない」と言いました。似たような新しい「旅」観がロマン派の世代をみるみる染め上げていきます。終わらない旅程をひとは生きるのだ……そんな思想が。

まさにドイツ歌曲が生まれた時代、ちょうど18世紀から19世紀に移るころのことです。



さすらいのテーマを好んだロマン派の詩人ノヴァーリス(1772-1801)。その透명한文章と思想をシューベルトも好んだ。

自分だけの痛み

音楽の話に移りましょう。ちょうどこの時代を生きた大作曲家が、モーツァルトとベートーヴェン。二人の生涯で大きく共通する点は何でしょうか? 20代で故郷の地方の小(中)都市から音楽の都ウィーンに出て、自分の腕を頼りに生きる決意をしたことです。理由は、それまで芸術家の人生をすっぱり包んでくれていた貴族や教会が、みる

みる力を失っていったこと。ヨーゼフ2世という当時の皇帝は修道院を700も閉鎖したといえますから、教会音楽の作曲家もお役御免になっていったわけです。つまりは就職の困難と、先の見えぬ人生航路。これこそ「さすらい」流行の動因にほかなりません。

それでもこの二人の作曲家はまだ貴族のパトロンに頼ることができていたのですが、ベートーヴェンの一世代下になると、だいぶ話が変わります。

フランツ・シューベルト。この青年は20歳で、教師になれという父に背をむけ、親友とルームシェアをすることで音楽家としての自立の道を歩み始めました。そして定住や私有財産をあまり好みません。吉田秀和がかつて書いたように、シューベルトは世界に自分の居場所がないことに気づいた最初の作曲家だったのでしょうか。

「日に日に世界が悪くなる 気のせいか? そうじゃない」。ハンバートハンバートの歌詞ではありませんが、若者にとって先が見えない灰色の時代にこそ、別世界に連れて行ってくれる特別な「わざ」がいちだんと光輝をおびはじめます。「美しいわざ」(ドイツ語でシェーネ・クンスト)を意味する芸術です。そんな新しい芸術哲学を、さすらいの人生観のなかで語りだしたのが《音楽に寄せて》(D550)。20歳のシューベルトが、同居人である親友の詩につけた一曲です。

この歌曲は、今でこそ教科書に載るくらい有名になりました。しかし、この歌曲が生まれるほんの数十年前まで、芸術家は貴族や教会のもとに生活していたわけですから、これは若者

に“刺さる”新しい声だったに違いありません。ギターを片手に、「西向き部屋 壊さぬよう」そっと歌うフォークソングみたい。

孤独を聴く

さすらいの気分は、タイトルや歌詞にさすらいが出てこなくても、シューベルトの芸術をつらぬく哲学だといえます。《音楽に寄せて》がまさにそうだったように。

孤独な心を発露するシューベルトの歌曲は、尊敬するベートーヴェンでさえ成しえなかった革命でした。そこに友と静かに歩く喜びが加わるか、独りぼっちで狂気すれすれの世界をゆくか—それはケースバイケースです。

誰しも感じているにちがいない“寂しさ”を、まだ誰もやっていない仕方、音にできたこと。マーケティング的にみると、シューベルトは「売れる」商品ジャンルをいち早く独占的に開発したことになります。市場に通じた友人のおかげで、売り方も思いきったものでした。それまでは短い歌曲をいくつかセットにして売り出すのが常識だったのですが、初出版となる「作品1」は、18歳で書いたとんでもなく難しい1曲だけを一冊にしています。誰もが知る《魔王》(D328)です。

このデビュー作も、お父さんにはわからない自分だけの世界に殉じる内容。なので、さすらいの思想はこんなところにも浸透していると言えるのではないのでしょうか。



モーリッツ・シュヴィント《魔王》(1830ころ)。親友シューベルトの音楽は、画家や詩人にも多大な靈感を与えた。

来たる4月5日のリサイタルは後期作品ばかりを集めたものですが、じつはクリストフ・プレガルディエンは過去の録音で、驚くべき声のコントロールで、《魔王》に衝撃的な表現を与えています。この歌手はドイツ歌曲のスタンダードであり、かつチャレンジャー。ぜひ聴いてみてください。

そして皆さまも、今を生きるひとりの「さすらい人」として、孤独な芸術家の発した問いかけに答えてみてほしいのです。シューベルトの碑文(初期バージョン)に詩人グリルバルツァーが刻んだように—

さすらい人よ! 君はシューベルトの歌曲を聴いたろうか?

この石の下に、彼は眠る(それを歌いし者、ここに眠る)



シューベルトが葬られた墓地(ヴェーリング通り)。碑文には詩人グリルバルツァーによる以下の最終バージョンが刻まれている。「音楽はここに豊かな財産を葬った/もつとうるわしい希望さえも」

堀 朋平(ほり・ともへい)

1979年生まれ。国立音楽大学大学院修士課程修了。東京大学大学院博士課程修了(文学博士)。主著に『わが友、シューベルト』(アルテスパブリッシング、令和5年度芸術選奨文部科学大臣新人賞・評論部門)。住友生命いずみホール音楽アドバイザー。九州大学ほか非常勤講師。

●編集部より

クリストフ・プレガルディエン(テノール) & 渡邊順生(フォルテピアノ)デュオ・リサイタルに向け、シューベルトの音楽に造詣が深い堀朋平氏にエッセイ(全3回)をご寄稿いただきます。これをお読みいただければ、シューベルトの歌曲がぐっと身近に感じられること、間違いありません。どうぞ、お楽しみに。

なお、次回以降はweb連載となり、第2回は3月上旬、第3回は3月中旬に当館ホームページにて公開を予定しています。

■公演情報

クリストフ・プレガルディエン (テノール) & 渡邊順生(フォルテピアノ)

2026.4.5(日)14:30開場 15:00開演
全席指定 一般¥6,000
U-25(25歳以下)¥2,000

●曲目

シューベルト:悲しみ D772
別れ(《白鳥の歌》D957 第7曲)
セレナード(《白鳥の歌》D957 第4曲)
愛の使い(《白鳥の歌》D957 第1曲)
秋 D945
遠い地にて(《白鳥の歌》D957 第6曲)
すみか(《白鳥の歌》D957 第5曲)
戦士の予感(《白鳥の歌》D957 第2曲)
美も愛もここにいたことを D775
春の憧れ(《白鳥の歌》D957 第3曲)
春に D882
私の心に D860
深い悩み D876
ヴィルデマンの丘で D884
漁師の娘(《白鳥の歌》D957 第10曲)
海辺にて(《白鳥の歌》D957 第12曲)
都会(《白鳥の歌》D957 第11曲)
影法師(《白鳥の歌》D957 第13曲)
彼女の肖像(《白鳥の歌》D957 第9曲)
アトラス(《白鳥の歌》D957 第8曲)

INFORMATION

※以下は1月30日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

好評
放送中!

チケット・インフォメーション

《3.28(土)発売予定》

■ **ちょっとお昼にクラシック 児玉麻里&児玉桃(ピアノ・デュオ)**
7.2(木)13:30

■ **あひるの会合唱団(混声合唱)** ■ **カルテット AT 水戸 第4回演奏会**
7.12(日)14:00 7.18(土)14:00

3月・4月の主な音楽イベント

コンサートホールATMほか

- ◆ **井上修 ピアノ・リサイタル**
3.1(日)14:00 料金[全席自由]一般¥3,000/U-25(25歳以下)¥1,500
- ◆ **庄司紗矢香(ヴァイオリン) & ジャンルカ・カシオーリ(ピアノ)**
3.7(土)15:00 料金[全席指定]一般¥6,000/U-25(25歳以下)¥2,000
- ◆ **アンサンブルくま 第4回演奏会**
3.8(日)14:00 料金[全席自由]一般¥2,000/学生(大学生以下)¥1,000
- ◆ **伝統芸能のススメ[聲明]**
四箇法要 花びらは散っても花は散らない 附 宮内康乃作曲(海霧讃歎)〈海霧廻向〉
3.14(土)15:00 料金[全席指定]一般¥4,500/U-25(25歳以下)¥1,500
- ◆ **準・メルクル弦楽器貸与プロジェクト 発表会**
3.20(金・祝)14:00 入場無料(要事前予約)
- ◆ **小菅優「ソナタ・プロジェクト」Vol.4(最終回)黄昏**
3.22(日)15:00 料金[全席指定]一般¥4,000/U-25(25歳以下)¥1,500
- ◆ **大西順子トリオ**
3.29(日)16:00 会場:ACM劇場
料金[全席指定]A席¥6,000/B席¥5,000/U-25(25歳以下)¥2,500
- ◆ **クリストフ・プレガルディエン(テノール) & 渡邊順生(フォルテピアノ)**
4.5(日)15:00 料金[全席指定]一般¥6,000/U-25(25歳以下)¥2,000
- ◆ **「茨城の名手・名歌手たち 第34回」出演者オーディション**
4.11(土)時間未定
- ◆ **作曲家・池辺晋一郎 生家ピアノ修復記念講演会**
4.12(日)14:00 会場:佐川文庫 料金[全席自由]¥1,500

エントランスホール

- ◆ **パイプオルガン・ブロムナード・コンサート(入場無料/事前予約不要)**
□ 3.15(日)12:00~12:30/13:30~14:00 内田莉子
□ 4.19(日)、4.26(日)12:00~12:30/13:30~14:00
※出演者は、決まり次第当館Webサイトに掲載いたします。
- ◆ **ブロムナード・コンサートEXTRA**
□ 4.29(水・祝)12:00~12:30/13:30~14:00 石坂淑恵(ヴァイオリン/ヴィオラ)
- ◆ **「市民のためのオルガン講座」受講生による発表会**
3.28(土)13:00 入場無料(要事前予約)

2026年2月10日発行(第275号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、渡辺有美

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

編集後記

歌劇《魔弾の射手》でおなじみのドイツの作曲家、ウェーバー。《交響曲第5番》(とりわけ第4楽章)でおなじみのソ連の作曲家、ショスタコーヴィチ。そして、《フニクリ・フニクラ》でおなじみのイタリアの作曲家、ルイージ・デンツァ。実はみんな、丙年生まれなのでした。(角)

時すでに2026年ではありますが、昨年のショパンコンクール配信映像を見たり、入賞者の演奏を聴いたりしながら、今もショパンに浸っています。演奏者や使用するピアノによってそれぞれの持ち味があり、さまざまな魅力が見えてきます。(視)

この間、久しぶりに池袋に行きました。学生の頃、毎日のように通っていた池袋なのに、学生の頃の記憶が少ししか残ってなくて、池袋駅で迷子になりました。ずっと思ってたけど、なんで東武が西口、西武が東口にあるんだらう…(春)

新年を迎えてから小さな「初挑戦」を重ねています。無脂肪乳でラテを飲んだり、新しいカフェに行ったり、コンビニでゆで卵を買ったり。ただ、お気に入りのラーメン屋さんではいつもの味を頼んでしまいました…。食以外の挑戦も頑張ります。(辺)

学生時代に国立劇場で石井巖木氏の《蛙の聲明》(再演)を観て「うっげえ!」と驚嘆しました。自分にとっては新作聲明が初めての聲明体験でした。当時のプログラムを取り出して見ると、今度3月14日には出演くださる方のお名前もいくつかありました。感慨深いです。(篠)

初めて堀平平さんにご執筆をお願いしました。そのご著書は大変読み応えがあり、章を終るごとに「わが友、シューベルト!」という呼びかけが自然と胸にこだましてくる本です。今号掲載のエッセイの続編はウェブにて。お楽しみに。(て)

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▶ Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▶ radiko(ラジコ)でもお聴きいただけます <https://radiko.jp/>



演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆ 伝統芸能のススメ[落語]

柳家花緑独演会

3.1(日)14:00

料金[全席指定]S席¥4,000/A席¥3,500/B席¥2,500



現代美術ギャラリー

◆ 飯川雄大 大事なことは何かを見つけたとき

2.28(土)~5.6(水・振)

[休館日]月曜日(5.4(月・祝)は開館)

[開場時間]10:00~18:00(入場は17:30まで)

[入場料] 一般¥900/団体(20名以上)¥700 高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



飯川雄大(デコレータークラブ・ピンクの猫の小林さん)2022年、彫刻の森美術館(神奈川県)での展示風景
Photo: Takafumi Sakakana, courtesy of the artist

茨城の名手・名歌手たち 第34回 出演者オーディション

11.29(日)に開催予定の演奏会に向けて出演者オーディションを行います。

【開催日】4.11(土) 管楽器・打楽器・声楽部門(以上ソロ)、器楽アンサンブル部門

【申込期間】3.3(火)~17(火)必着 ※レッスンの日程や応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

準・メルクル弦楽器貸与プロジェクト貸与者募集

音楽家を目指す若い弦楽器奏者の支援・育成を目的として、30歳以下の方に無償で貸与しています。※詳しくは当館Webサイトをご確認ください。

【試奏会】4.4(土)14:00~17:00 【申込期間】4.5(日)~4.18(土)

市民のためのオルガン講座 2026年度受講生募集

◎一回体験:気軽に1時間、オルガン体験を楽しめるコース(定員12組)

◎実技レッスン(初級):9月から約半年間、12回のレッスンで基礎的奏法を学ぶコース(定員:4名)

◎実技レッスン(中級・上級):初級もしくは、中級を修了した方が、さらにオルガンを学ぶコース(定員:若干名)

【申込期間】4.1(水)~4.30(木) ※レッスンの日程や応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

